

□ Eiji TAKAHASHI: **Electron Microscopical Studies of the Synuraceae (Chrysophyceae) in Japan.** Taxonomy and Ecology. 194 pp. (68 pls.) 東海大学出版会 (1978) 定価 7,000 円

緑藻, 褐藻, 紅藻については採集したり調べたりした経験をもつ者はほとんどであろうが, 黄金色藻類 (Chrysophyceae: 黄色鞭毛藻類, ヒカリモ類ともいう) はと聞くと, 一体それはどんな藻類? とまでは言わないとしても, 見たことも採集したこともない藻類研究者や同好者がまずおられるにちがいない。肉眼で見えるものは大発生するヒカリモのようなもので, ほとんどが単細胞性が群体性で, しかも鞭毛をもって泳ぎ回るので, 顕微鏡下ではなはだとらえにくい。珪藻や接合藻のようにはと目を見はらせる形の面白さがない。それに加えて折角の固定, 保存が役立たないで, くずれたりこわれたりしてしまうのが多い等々, 多くの人にながしろにされてきたとしてもいたしかたのないような性質をこの藻類の仲間には備えている。最近, 電子顕微鏡技術の進歩や生理生化学的知見の蓄積に伴い, 植物の系統類縁関係における黄金色藻類のもつ重要性の認識がますます高まってきた。しかし残念乍らこの藻群の分類や分布について本格的に取り組んだわが国の研究者はほとんどなかった。最近あげられた黄金色藻類についての華々しい研究成果もそのほとんどすべては日本以外の国で生みだされた。

今回出版された高橋永治博士の「日本産シヌラ科 (黄金色藻綱) の電子顕微鏡による研究, その分類と分布」は著者の約20年の永きに亘る研究成果の集成であり, 上述の経緯を考えると, この刊行物は日本の藻学の歴史において記念すべきものと言える。

著者は黄金色藻類の材料を得るために, 日本各地の96に及ぶ池や湖から水を 0.5 (または 1.0) l づつ2つの瓶に汲み, 1つはフォルマリンまたはルゴール液で固定, 保存し, 他の1つはそのままを遠心分離して全量を 1~2 ml に濃縮して検鏡に供した。

本書の内容は, I 序論, II 材料と方法, III 結果と考察, IV 要約, V 謝辞, VI 文献・索引などの6章から成

る。主体となる III 章は (1) 藻の外部形態 (2) 種の記載 (3) 地理的分布 (4) 季節的消長を含み, 全体の約9割の頁数を占める。(1) では分類の識別形質にとりあげられる鞭毛, 被殻, 鱗片等の形態について顕頭及び電顕レベルからの解説, (2) では120頁に亘る種の記載がある。ここで扱われる属の数は6つ (*Mallomonas*, *Mallomonopsis*, *Synura*, *Chrysosphaerella*, *Spiniferomonas*, *Paraphysomonas*) で, 種類数は変種と型を含めてそれぞれ, 5, 26, 11, 2, 7, 4で, 合計55に及ぶ。このうちの1属 *Spiniferomonas* と13種 (*Mallomonas* 4種, *Spiniferomonas* 7種, *Paraphysomonas* 2種) は著者により設立命名された分類群である。それぞれの属には種の検索表が添えられ, 種の記載は顕頭及び電顕レベルでとらえた特徴と分布上の特徴等を含む。各分類群には鱗片を中心とした電顕写真が添えられ, また多くの種について全体像が図示され, 種の階級の識別を容易にさせる。この藻群は季節のちがいににより体形や大きさに変化を生ずるものが多いことから, いくつかの種については, 定期的に採集した資料に基づく形質の比較が表やグラフにより示される。(3) の項では, 著者が約20年に亘って日本各地の陸水域から採集した96地点における各分類群の出現を示す地図や表が折込まれ, さらに日本以外の地域の分布についても触れられる。(4) では, シヌラ科の藻類の生育の季節的消長が, 主として山形県鶴岡市の3つの池で毎月2回づつ1年間に亘って定期的に行われた観察の結果に基づいて記述される。出現個体数と水温や pH との関係などが中心となる。

以上, 高橋博士のシヌラ科の藻類の本の内容を簡単に紹介したが, 著者がさきに分担執筆して発行された「日本淡水藻図鑑」の「黄色鞭毛藻綱」の章と相俟って, 日本における今後の黄金色藻類の研究の発展に果す本書の役割は大きいと信ずる。この藻群は水界の生産者であると同時に指標生物としても注目されるべきものであり, 一般藻類の研究者だけでなく, 広く水界と生物の仕事に関係される方達にも役立つものと思われる。(筑波大学生物科学系 千原光雄)

◎インド洋海域海藻国際シンポジウム(International Symposium on Marine Algae of the Indian Ocean Region) の案内

1979年1月に上記シンポジウムがインド, Bhavnagar の中央塩・海化学研究所で開かれる予定です。インド洋の海藻についての基礎から応用までの各分野に興味のあるすべての人に開放されています。参加を希

望する方は直接下記宛へ申し込んで下さい。
Dr. P. S. Rao, Secretary and Convener, International Symposium on Marine Algae of the Indian Ocean Region, Central Salt & Marine Chemicals Research Institute, BHAVNAGAR 364 002 (India).

nom. jap.: Tama-hahaki-moku タマハハキモク
Lectotype: TI (Izumo, Prov. Kii, Apr. 1902)

現在手許にある標本からも、ミヤベモクは本州北部から北海道周辺、樺太、南千島に分布し、タマハハキモクは宮城県以南の本州太平洋岸、四国、九州に分布しており、両方が混生することはない様である。しかし分布範囲については更に標本を集めなければ明確にすることはできない。

なお、曾・張 (1954) は *S. kjellmanianum* f. *longifolia* を中国山東省、河北省、遼寧省から記録した。雌雄同株であること等の記述から、この品種も *S. muticum* に含まれるものと判断される。

Sargassum muticum* f. *longifolium (TSENG et CHANG) YOSHIDA, comb. nov.

Basionym: *Sargassum kjellmanianum* f. *longifolia* TSENG et CHANG, Acta Bot. Sinica 3: 358. pl. 1, pl. 2. 1954.

原稿を校閲して下さった北大理学部黒木宗尚教授、標本の借覧を許された北大農学部四方英四郎教授、東

大総合資料館大場秀章氏に深謝する。

引用文献

FENSHOLT, D. E. (1955) An emendation of the genus *Cystophyllum* (Fucales). Amer. Journ. Bot. 42: 305-322.

猪野俊平 (1947) 海藻の発生. 北隆館, 東京 255 pp.

TOKIDA, J. (1954) The marine algae of southern Saghalien. Mem. Fac. Fish. Hokkaido Univ. 2: 1-264.

曾呈奎・張俊甫 (1954) 中国馬尾藻属的研究 III. 解氏馬尾藻. 植物学報 3: 353-366.

山田幸男 (1944) みやべもくノ基部. 植研 20: 225.

山田幸男 (1954) ハハキモク (*Sargassum kjellmanianum* YENDO) の原標本について. 藻類 2: 45-47.

YENDO, K. (1907) The Fucaceae of Japan. Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo 21(12): 1-174.

* 北海道大学理学部植物学教室 (060 札幌市北区北10条西8丁目)

◎第13回・国際植物学会 (XIII International Botanical Congress) の案内

第13回・国際植物学会議が1981年(昭56年)8月21日~28日にわたってシドニー(オーストラリア)で開催されます。この第10部会—海・淡水植物学の chairman であるウマズリー教授(アデレード大学植物学教室)から下記のような案内が当学会にきています。

○Section 10. Marine and Freshwater Botany.

部会は全期間中開催の予定。海草、マングローブ、および藻類学のあらゆるテーマについて、シンポジウムと一般講演が行われる。提出された論文について、口頭発表は選択されるが、残りは要旨か全文が出版される予定。また展示もできる。

下記の Topics と Field trips が計画中であるが、これらおよびそれ以外のものについて、意見や提案があったら申し出てほしい。

○Topics (題目)

- 1) 微細構造と生化学的研究を含む、藻類の形態と分類についての新知見
- 2) 藻類の有性生殖
- 3) 藻類群落の構造と動態
- 4) 熱帯サンゴ礁での藻類の役割
- 5) 南極藻類学
- 6) 海草 (Seagrasses) とその生物学
- 7) 藻類・海草・マングローブ群落の生産力

8) 南半球に力点を置いた藻類の生物地理学

9) 南半球での藻類の利用

10) 珪藻の分類と生物学

11) ラン藻類の分類学的概念

12) 化石藻類

以上の題目は重ならないよう計画されているが、多少は重なるかも知れない。しかし、重なっても希望者の大多数は参加できるよう計画中である。

○Field trips (見学旅行)

1) (会期前) 海草とマングローブを含む、大堡礁(海岸に平行に走るサンゴ礁)であるヘロン島への旅行(7日間)

2) (会期後) オーストラリア固有海産分類群のためのメルボルンとアデレードへの海岸めぐり(8日間)

3) 淡水生育地へのシドニーからメルボルンへの旅行(6日)(会期前旅行の予定)

4) 期間中の1日旅行

(a) C. S. I. R. O の Cronulla にある水産・海洋学部の見学、海草群落見学のためのボート旅行。

(b) マングローブ、海草および藻類群落のための Botany Bay への旅行。

(c) 海食台 (rock platform) への旅行。

(d) 淡水生育地への1乃至数回の旅行。